

煩惱即菩提

文学教授 安井広濟

これから申し上げます「煩惱即菩提」ということは、なかなかむづかしい問題を含んだ事柄でございまして、過去の仏教、あるいは現在の仏教研究におきましても、かならずしも一致した理解が示されているわけでもございませぬ。それだからというわけでもございませぬが、今日申し上げますところ、これも私なりの理解でございまして、いろいろと御批判をいただきたいと存じております。いったい「煩惱が即ちだちに菩提である」ということは、常識的にはどうてい考えがたいところであります。煩惱は、私たちがもっている貪欲の心、瞋恚の心、愚痴の心、あるいは虚栄の心のような人間の本能的な心のことでありまして、私たちはこの煩惱の心によりまして、精神的にも肉体的にも、煩わされ、悩まされるのであります。私たちの人生は貪欲や瞋恚や愚痴の心によつて、波立ち、惑乱され、傷つけられる。貪欲の心は人生を浅間しくし、瞋恚の心は人生を冷たくし、愚痴の心は人生を暗くいたします。でありますから、煩惱は、仏教において、人間を傷つける毒であり、罪であり、悪であり、悪魔である、とされております。これに反しまして、菩提は、煩惱の悪魔をほろぼし断じた、安らかな悟りの智慧 (bodhi) のことでありまして、こういう、悟りの智慧である菩提と悪魔の如き煩惱の迷いの心とが同一

であるとは、どうてい考えがたいところで、同一であると考えるところに、いろいろの解釈や理解がでてくるわけでありませぬ。

一

いったい仏教のごく一般的ないい方をいたしますと、仏教の目的は、煩惱をほろぼし断じた菩提の智慧をうることにあります。それでありませぬから、そのかぎり、煩惱は菩提でなく、両者ははっきり区別されるべきであります。仏教では、諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜を三法印といいます。仏教の三つの旗じるしという意味であります。諸行無常とは、一切の存在が諸の条件(因縁)によつて形成されたものであり、条件が散ずれば、変化し、刹那といえども同じ状態にとどまらぬ、永續性のない存在である、ということでありませぬ。そして、一切の存在が無常であるということになれば、一切の存在は自我的な固執、執着の心によつて把握すべからざるものであるということになります。ところが、私たちは、諸行無常、諸法無我の理法に無自覚であり、存在の常住な永續性を思考し、あるいは、自我や自我の所有に固執、執着し、貪欲、瞋恚、愚痴などの多くの煩惱を生ずるのであります。それでありませぬから、煩惱は、無常・無我の理法が真実に認識されるならば断ぜられるところのもので、こういう煩惱の火が断ぜられた境地を涅槃寂靜と申します。こういうのが仏教の教えであります。ですから、初期の仏教では、煩惱は断ぜられるべきもの、涅槃の菩提は得られるべきものとして、区別いたします。そして、煩惱を断じた人のことをアラカン(阿羅漢 arhan)

といいます。アラカンが、「応供」といわれますとともに、「殺賊」ともいわれますのは、アラカンが煩惱の火を吹き消した涅槃の完成者であるからであります。しかし、たとえ、煩惱を断じてアラカンとなっても、肉体は存在しつづけるわけでありますが、そのかぎり、はたして、煩惱が断ぜられるのであろうか、とも考えられます。睡眠欲や食欲のような本能を人間よりとり去ることが、はたして可能であろうか、とも考えられます。しかし、どこまでも、戒律を守り、あるいは、精神の安定をはかる禪定を修め、智慧を磨くことによつて、あらゆる本能・煩惱を断じつづけるのが、アラカンの聖者の涅槃であります。ただ、初期の仏教によりますと、煩惱を断じた涅槃に、有余依涅槃と無余依涅槃とが区別されます。有余依涅槃とは、煩惱を断じたが、残余の依身である肉体が有る涅槃のこと、無余依涅槃とは、煩惱とともに肉体もまた空無に帰し死滅した灰身滅智の涅槃のことです。ウダーナ第八品にいわれるへ身は壊れ、想は滅び、受もまたすべて焼け失せたり。諸行は止息せり、意識は滅尽に達したり。という言葉は、このような無余依涅槃の状態を語るものと思われまします。初期の仏教は、このような無余依涅槃を究極の理想とするアラカンの道であつたと考えられるのであります。

二

しかし、大乘仏教になりますと、非常におもむきが違ってまいります。まず、大乘仏教によりますと、初期の仏教の人々（小乗声聞の人々）は、へ意識の表面におこる「起煩惱」を断じている

が、意識の表面にあらわれない潜在的な煩惱の習慣性である「習氣の煩惱」を断じておらず、それにもかかわらず、滅尽三昧の酒に酔い、涅槃を得たと想っている」と非難されております。アラカンを目標とする小乗声聞の人々は、煩惱にたいする反省のたりない人々であり、習氣の煩惱をともなつた不完全な涅槃の解脱しか得ていないにもかかわらず、滅尽三昧の酒に酔っている。そして最後には、習氣の煩惱がなくならないままに、無余依涅槃にはいり、死んでいくわけでありまします。こういう習氣の煩惱という反省をもちましますところに、大乘仏教の特色があるのでありまして、勝鬘經に説かれる住地（*vasanahūmi*）の煩惱も、この習氣の煩惱と同じ内容のものとしてさしつかえないものであります。また、唯識のアーラヤ識の学説において語られます習氣の思想がこれであることはいうまでもありません。大乘仏教が習氣の煩惱という心の深層に持続する深い根源的な煩惱の執着を語るところとは、人間の煩惱がいかに抜き難い、根深い執拗なものであるかについての深い反省の結果であつたといふべきであります。

では、なぜ、こういう深層に持続する習氣の煩惱というようなことを、大乘仏教は語るのかといひますと、小乗仏教は、現実のあらゆるものが、永続性のない無常な存在であり、執着すべからざる無我な存在であるといふことを知らない、無自覚な煩惱の心を取り去ろうとした。そして、静かな煩惱のない、平安の状態をめざしたのであります。しかも、最後には、無余依涅槃の死を理想としたのであります。しかし、この態度は、実は、現実をたいする諦め、断念の態度といふべきであります。現実のすべては、

無常であり無我であつて、自分の思うようにどうにもならないから、自我を捨て煩惱を捨て肉体をほろぼしていくより仕方がないという、消極的な諦めの態度であります。しかし、消極的な諦めの態度であるかぎり、そこには、いやいやながら諦めるところ束縛の気持が残される。これが、いわゆる法執といわれるもので、今申します習気の煩惱といわれるものが、これであると考えられるのであります。しかも、小乗の人々は、かような習気の煩惱の解決をつけずに、無余依涅槃にはいり、死んでいこうとした。しかし、これでは解決にならないので、大乘仏教は、いやいやながら諦めるところとならぬ自由な束縛の態度をとらず、いわば、スッパリと諦めるといいますか、全く現実の事象にとらわれない、現実には打ち勝つような自由な心を得ようとするのであります。自我を捨て、煩惱を捨て、肉体をほろぼして死んでいこうとするような諦めの態度をとらず、現実を見直すような、明るい自由な心の実現をはかり、力強い心の回復をはかろうとするのであります。そこに煩惱よりの完全な解脱の境地というものを考える。これが、大乘仏教の空観や唯識観のめざすところであります。そして、大乘仏教は、さらに今日申し上げます「煩惱即菩提」ということを語るのであります。

三

この「煩惱即菩提」の思想は、以上申しました、人間の心の自由な実現をはかり回復をはかろうとする大乘仏教の態度から、当然、考えられるところのものであります。直接には、われわれ

の煩惱こそ、菩提実現のための場所であればならないという考え方から出てくるように思われます。先に申しましたように、初期の小乗といわれる仏教は、煩惱を断じ肉体をほろぼしていくラカンの道であり、煩惱と菩提とを区別したのであります。しかし、大乘仏教からいいますと、煩惱は断ぜられるべきものでなく、菩提実現のための場所であればならない、と考えられるのであります。たとえば、『中論』によりますと「生死にはなんら涅槃との区別はない。涅槃にはなんら生死との区別はない。」といわれております。また、撰大乘論によりますと「煩惱は寛分となり、生死は涅槃の自体なり。」といわれております。これは、あきらかに、煩惱を捨てた外に菩提があるのではなく、煩惱と菩提とは二つのものでない、ということであります。「煩惱の水とけて菩提の水となる」という言葉がありますように、煩惱は菩提へ転換される場所の、菩提実現のための場所であつて、煩惱と菩提とは一つのもので、ということであると考えられます。大乘仏教では、煩惱を断ずるといふ否定的な態度を「無の見」あるいは「断見」であると、厳しく非難しております。あるいは、へ先に、貪欲、瞋恚、愚痴の煩惱の存在を認めて、後から、貪欲、瞋恚、愚痴の煩惱の存在なしという人は、破壊者 (vānśika) である。ともしつております。破壊者といふものは、煩惱を断じて無余依涅槃にはいろうとする如き態度は、人間それ自体を破壊し没し去る、言葉が穩当を欠くかも知れませんが、いわば、自殺行為の如きものである、ということであります。要するに、煩惱を捨てて死んだ人間になるのではなく、生きながら、煩惱の迷

いの生活を、菩提の悟りの生活へ否定的に転換するのであります。大乘仏教では煩惱的な現実の生活を重んずるのであります。ここに、煩惱即菩提ということがいわれるのであります。

こういうように、大乘仏教は、煩惱的な現実の生活を重んじ、そこに、菩提を語ろうといたしますから、たとえば、『維摩経』の「仏道品」へ高原の陸地に蓮華を生ぜず、卑湿の淤泥に、乃ち此の華を生ず」と説き、また「煩惱の大海に入らざれば、則ち、一切智の宝を得ること能わず」と説くのであります。鳩摩羅什の漢訳では「仏道品」といわれておりますが、チベット訳によりますと、「如来種姓品」となっておりまして、汚濁の泥沼に清浄の蓮華が咲くように、現実の煩惱こそ如来たりうる種姓（Gotra）なのであります。換言すれば、煩惱こそ、如来の菩提を実証すべき場所であり、如来蔵であり。仏性であるといえるわけです。また、『維摩経』の「弟子品」を見ますと、須菩提が維摩の家へ行乞に行ったとき、維摩が出てきて、須菩提の鉢に上等の食事を満たして、次のようにいいます。〈汝（須菩提）が、師〔である仏陀〕を見ず、法を聞かず、僧伽に敬事せず、ブールナ、カーンパ、……などの〔外道の〕六師が汝の師であり、彼らに従って出家し、……悪魔とともにあり、一切の煩惱が汝の友となり、煩惱の自性が汝の自性であり、一切の人々にたいして汝が害心をいだき、一切の仏陀をそしり、一切の仏法を称揚せず、僧伽によらず、繫涅槃しないならば、この食を受けよ。〉と。この維摩の説法は、宗教や倫理を無視した邪悪の生活をすすめるようでありまして、須菩提はこの維摩の説法を聞いて、啞然とし

て「何の言たるかを識らず、何を以て答うるかを知らず。」といっております。しかし、菩提は、汚濁の世界を超越した清浄の世界にあるのではなく、仏をそしり、法を聞かず、悪魔の声を聞く邪悪の現実生活の中に反省され実証されるものでなければならぬ。他の人に害心をもち、邪見をもつ、清浄な涅槃にほど遠い、現実の悪の生活の中に得られるものでなければならぬ。維摩は、須菩提にたいして、こういうような煩惱即菩提において菩提の眞実の意義があることを注意するのであると考えられます。

四

このような大乘仏教の煩惱即菩提の思想は、出家仏教にたいして在家仏教を主張するものではないかと考えられます。初期の仏教は、煩惱の世界を否定した外に菩提の世界を求め、汚濁の生活を捨てて清浄な寂靜の悟りの境地を求めたのであります。有余依涅槃を求め、最後には無余依涅槃の死を理想としたのであります。これは、禁欲主義的な僧院の仏教というべきものであります。しかし、人間の現実生活より遊離した菩提は、菩提の抽象的な形骸であります。菩提は、人間の煩惱の在俗生活の中に反省され実証されるところに、生きた意義をもつのであります。小乗の声聞は、菩提・涅槃の実践的意義を見失っている、といっているであります。菩提は僧院の出家仏教の中にあるのではなく、在俗の生活の中にある。このように大乘仏教は、在家仏教というかたちで、仏教の菩提に眞実の生命を与えようとした、と考えられます。かくして、煩惱即菩提の思想は、在家生活における煩惱

即菩提の實踐といふかたちになつてまいります。『維摩經』の「方便品」に、維摩の人物を述べて、へ白衣たりと雖も沙門清淨の律行を奉持し、居家に処すと雖も三界に著せず、妻子あるを示せども常に梵行を修し、眷屬あるを現すれども常に遠離を樂い、……俗利を獲と雖も以て喜悅せず、諸の四衢に遊んで衆生を饒益し、治生の法に入つて一切を救護す……といつてゐるのが、これでありませう。小乗のアラカン道にたいする大乘の菩薩道とは、かような在家庭生活における煩惱即菩提の實踐の道を説くものと考えられます。これが、淨仏国土、成就衆生の大乗菩薩行の理想であると考えられるのであります。皆さんよく御存知の宮沢賢治という東北の詩人があります。この人は、こういう在家庭生活における大乘の菩薩行を實踐することを理想とした詩人であつたように思われます。彼の有名な「雨ニモマケズ」という詩には、大乘菩薩行にたいする彼の仏教者としての理想が強くうたわれているように思ひます。讀ましていただきますと、

雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ 丈夫ナカラダヲモチ 欲ハナク
 決シテ願ラズ イツモンズカニワラツテイル 一日ニ玄米四合
 ト 味噌ト少シノ野菜ヲタベ アラユルコトヲ ジブンヲカンジ
 ヨウニ入レズニ ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ 野原ノ
 松ノ林ノ蔭ノ 小サナ萱ブキノ小屋ニイテ 東ニ病氣ノコドモアレバ 行ツテ看病シテヤリ 西ニツカレタ母アレバ 行ツテソノ
 稲ノ束ヲ負イ 南ニ死ニソウナアレバ 行ツテコホガハラナクテ
 モイトイイ 北ニケンカヤソシヨウガアレバ ツマラナイイカラ
 ヤメロトイイ ヒデリノトキハナミダヲナガシ サムサノナツハ

オロオロアルキ ミンナニデクノボウトヨバレ ホメラレモセズ
 クニモサレズ ソウイウモノニ ワタシハナリタイ。この詩には宮沢賢治が大乘の菩薩行を理想とした人であることがまことに感銘深くあらわれていると思ひます。彼は、在俗の煩惱の生活の中に菩提を反省し、無我の人となり、利他救済の行人となることを理想としたのであります。仏教の菩提は、宮沢賢治が理想とする、かような大乘菩薩行を實踐する在俗の人間において生きて意義をもつのでありまして、寂滅の涅槃の如きものではないのであります。これが、今日申します煩惱即菩提ということについての第一の結論でございます。

五

しかし、ここでもうすこしついで考へねばならないと思ひますので、申し上げますが、それは、果して煩惱ある在家庭生活の中に菩提が實踐されるか、ということでもあります。『維摩經』に説かれますような「白衣(在家)たりと雖も沙門清淨の律行を奉持し、居家に処すと雖も三界に著せず、妻子あるを示せども常に梵行を修す……」とか、宮沢賢治が「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ野菜ヲタベ アラユルコトヲ ジブンヲカンジヨウニ入レズニ ヨクミキキシワカリ……東ニ病氣ノコドモアレバ 行ツテ看病シテヤリ 西ニツカレタ母アレバ 行ツテソノ稲ノ束ヲ負イ……」というようなことが、果たして、実行できるのであるか。在俗生活の中に煩惱即菩提の菩薩行を實踐することは、たしかに大乘仏教の美しい理想の道であると思ひますけれども、

果たして、かような大乘菩薩行が実践できるか、ということになります。

曾って、私は徳川末期の国学者である平田篤胤の著作を読んだことがあります。そして、驚いたのでありますが、この人は、煩惱の否定が不可能であるという立場から、烈しく仏教を罵倒しているのであります。二、三紹介しますと、へ人に愛情を棄てろの、無心になれの、うぶのままになれの、愛憎という好き嫌いを止めよのと、仏の口真似して、誠の人にはとんと出来ぬことを勧めるが、其れはならぬことぢや、へ妻子の愛情がすてられるのか。棄てられぬのが誠のことで、人の道ぢや、へ此の空教はただ口に言ふべくして、衆生は更なり。仏祖も比丘らも、行い得ざりし法になむ、というような言葉があります。この平田篤胤の言葉は、仏教を欺瞞の宗教とする、きわめて悪意ある、ずいぶんひどいいい方であると思うのですが、しかし考えて見ますと、たしかに平田篤胤が申しますように、妻子の愛情はすてられず、無心にもなれないのであります。それが誠の人であると平田篤胤はいいますが、これはともかくとして、妻子ある在俗の生活をするかぎり、梵行を修すとか、衆生利益をするというような無我の実践、いわゆる、煩惱即菩提の大乘菩薩行の実践は、とうてい考えられないのであります。それでありますから、過去のインド、中国、日本の仏教は、結局、在家の姿をとらず、居士仏教ということもいわれましたが、その大勢はやはり、妻子をもたぬ出家仏教というかたちをとったのであると思うのであります。けれど、出家仏教という形態をとるかぎり、仏教は現実の社会生活か

ら遊離してまいります。仏教は、小乗声聞の仏教におちいり、僧院の仏教になり、煩惱即菩提の大乘精神が見失なわれるのであります。仏教が中国におきまして、儒教から人倫を破り社会秩序を破って自己の解脱に逃避する宗教として、烈しく非難されますのは、この点にあります。仏教は、出家して妻をもたず、子供をつくらず、親に不孝になる宗教であり、家を破壊する邪教だというわけであります。儒教は人倫を説き社会秩序を語る公民的な宗教でありまして、この非難は当然だろうと思えます。

このように考えてまいりますと、仏教はやはり在家仏教というかたちをとらなければならぬと思われれます。そうでなければ、仏陀の菩提は、現実の社会生活に生きないわけで、煩惱即菩提の大乘精神が見失なわれるからであります。ただ、そのばあい、煩惱の在俗生活をしながら菩提を実践する、煩惱即菩提の大乘菩薩行は、これは平田篤胤が申しますように、たしかに不可能であります。煩惱をもちますかぎり、菩提の実践は、とうていなしがたいところであります。しかし、菩提が人間にとって実践しがたいものであるにしましても、煩惱のままに生きるのみでは、人間は野獣と異ならないわけであります。平田篤胤は煩惱がすてられないのが誠の人であると考えますが、煩惱のままに生きるのみでは、決して、誠の人ということができない。煩惱の生活を反省し、自我的な行動をつつしむところに、むしろ、誠の人間性があるというべきであります。このように考えてまいりますと、人間の真実の生き方というべきものは、煩惱の在家生活の中に、たとえ菩提を実証することが出来なくとも、煩惱の生活を慚愧し、菩提

を反省するものでなければならぬということになってまいります。煩惱即菩提の大乗の菩薩道とは、こういう反省的な人間の生き方でなければならぬと考えられてくるのであります。言葉をかえていいますと、仏陀の菩提を救済の真実として煩惱の自分の生活の上に反省していく、そこに、煩惱即菩提の大乗の菩薩道の意義があるということがあります。これが今日申し上げます、煩惱即菩提についての第二の結論でございます。

☐このように考えますと、煩惱具足の悪人こそ如来の救済にあづ

かるものだという親鸞聖人の悪人正機の宗教、聖人はへ罪障功德の体となる。こほりとみずのごとくにて、こほりおほきにみずおほし、さわりおほきに徳おほし。とうたわれておりますが、こういう親鸞聖人の宗教こそ、煩惱即菩提の大乗精神の最も具体的なあらわれであるといえると思います。仏陀の仏教は在家仏教をめぐって発展しているというべきであります。これは、仏陀の菩提が人類救済の真実であるからであると思います。(完)